

日から六月頃までと観測されているが、時に五月下旬頃にやってくると大被害を及ぼすことになる。それで農家では「百五の霜」などといって、立春より百五日を経ると霜もなくなり、苗のしつけをやってもよいなどしていた。この苗床に関する限りは、ビニールなどで蔽う温床が普及して、苗代の保温折衷苗代などと共に、優れた耕作技術で、防災が遂げられ始めている。

次は梅雨であるが、これは西南日本よりやってきて、大体東北地方でも南半で終る現象である。福島県の梅雨入り平均は六月十四日、明けは七月十七日ということになっているが、この三十三日間に、完全に雨の降らない日は平均して半分に満たない十五日、一ミリ以上降る日も十五日には達するという。しかし梅雨で恐ろしいのは梅雨そのものより、その梅雨明けごろやってくる、熱帯性低気圧の台風で、古くからの洪水記録も、近年の大洪水も、殆どこの梅雨終期に襲来していることである。このことは、洪水村の北会津村に特に重要なので、次項に詳述する。

会津盆地の気候は、日本では勿論大陸性などという激しいものではなく、内陸性とでもいってよいように、福島盆地ほどではないが、冬の寒い割合に、夏は温度が高い。年平均でみると、会津若松で一・四度、(撰氏、一九五四—一九六〇年平均)会津高田もほぼ同じであるが、月別にみると会津若松で一月零下〇・九度、二月零下〇・五度で共に零下となっている。一日の最低気温の累年の平均値をみると、会津若松は三月も零下になっている。

しかし、七、八月は比較的高温で、会津若松年平均七月二四・〇度、八月二五・五度となっている。日本の最高气温は、昭和八年七月二十五日、高温な東南風が奥羽山脈を越して山形盆地に吹き下し、フェーン現象という圧力の加わった特異な高温現象があつて、山形盆地で四〇・八度に昇つたのをレコードとしている。やはりその前日若松でも同じような現象が起つて三九・八度という記録があるが、その年は一日前の二十五日に坂下で三七